國學院大學学術情報リポジトリ

音声談話資料を用いた言語継承活動への取り組み：八丈語による紙芝居を例に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三樹, 陽介
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000939

音声談話資料を用いた言語継承活動への取り組み
―八丈語[1]による紙芝居を例に―

三樹　陽介

キーワード：八丈語、音声談話資料、ドキュメンテーション、紙芝居、消滅危機言語

1．はじめに

本稿では、音声談話資料を言語継承に役立てるために応用する実践例として、2016年度より取り組み始めた日本の消滅危機言語の一つである八丈語による紙芝居をドキュメンテーションとして記録し活用する取り組みについて報告する。

東京都の八丈島を中心に話されている八丈語は、2009年に国際連合教育科学文化機関ユネスコによって「消滅の危機に瀕する言語」に指定され、「危険」[2]と判断された。ユネスコの発表は、グローバル化の中で少数言語や文化の多様性が消滅していくことへの警鐘である。言語が消滅することは、地域の文化やアイデンティティが失われることにほかならず、地域コミュニティが弱体化・不安定化する一因ともなる。現在、伝統的な八丈語を話せる話者は500人程度で、その大半が70代以上とみられている。早急に調査・記録・保存することが必要であり、併せて言語継承活動の必要性が高まっている。

ユネスコの発表を機に、八丈町では教育委員会を中心として八丈語を残し継承させていこうとする運動が盛んとなっている。筆者もこうしたことを背景に八丈町教育委員会や国立国語研究所、研究者や話者との連携を図りながら、消滅危機言語保存の観点から音声付き談話資料（以下、音声談話資料）を作成している。また、音声談話資料を言語の保存のためだけではなく、言語継承活動や教育の場でも役立てられるように、一般島民や学習者向けに応用することを目指しており、八丈島の民話を基にした紙芝居を作成し、話者

による紙芝居の語りをドキュメンテーションとして記録し映像化して整備する活動を行なっている。以下、本稿ではこの取り組みについて論じる。

2. 八丈島について

八丈島は東京の南方沖約287kmに位置しており、行政区画上東京都に属し、八丈島本島と無人の八丈小島との２島で八丈町を形成している。八丈島本島は西山（八丈富士、854m）と東山（三原山、701m）の二つの火山が接合した北西－南東14km、北東－南西7.5kmのひょうたん型をした島で、面積は山手線の内側とほぼ同じ72.62㎢である。黒潮暖流の影響を受けた海洋性気候で、年平均気温は17.8℃、高温多湿で、年間を通して風が強く雨が多いのが特徴である。

八丈島の集落は、かつて交通の難所であった大坂峠を挟んで坂下と坂上とに二分され、さらに、坂下の三根・大賀郷と、坂上の樫立・中之郷・末吉の５集落に分けられる（図１）。島全体の人口は8,000人弱[3]、約4,500世帯が暮らしているが、人口は坂下に集中している。かつては坂上の中之郷・樫立が島の中心であったが、現在は坂下の大賀郷や三根に中心が移っており、町役場や空港などの島の主な施設はこの地域にある。

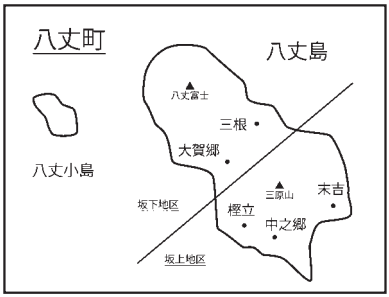

図1. 集落の位置関係

3. 八丈語について

3.1.概要

八丈語は、八丈町内の５集落で話されているが、金田章宏（2001）によれば文法的には大きな違いはないとされる。これらの５つの地域には音韻的対立がみられるが、それも主に二重母音の対立に限られている。

八丈語は萬葉集巻14・20にある東歌との間に文法的な共通点がみられ、古代日本語東国方言の流れを汲むものであると考えられている（北条忠雄

1966、平山輝男1968、金田章宏2001、2011など)。既に奈良時代には古代日本語東国方言が中央語と分岐しているので、八丈語もそれ以前に中央語と分岐したものと考えるのが自然であり、日本語本土方言と対立する姉妹語として琉球諸語以外では唯一のものとして学術的価値がある。また、八丈語は「他の本土方言との直接の関連がみられない」ものであり、「八丈方言は姉妹方言と呼べるものがなく孤立しているという点で、琉球諸方言とは状況が大きく異なる」(金田章宏2011)という点でも独自の存在といえる。

3.2.危機言語としての八丈語

八丈語は八丈島のほかにも八丈島の沖に位置する青ヶ島や東京都小笠原村、かつて八丈島からの移住が行なわれた沖縄県の南大東村でも話されている。しかし、青ヶ島では話者は10人を切っており、また、南大東島と小笠原諸島では部分的に話されているのみで、金田章宏(2014)によれば、「八丈語を多少なりとも保存しているのは現在ではそれぞれ1桁程度」で「極めて断片的」なものであるという。かつては八丈島の属島である八丈小島でも話されていたが、1969年に本島への移住事業が行われたため、現在は無人となっている。しかし、八丈小島の鳥打・宇津木地区の出身者が現在も八丈島本島に在住しており、かつての鳥打・宇津木方言の面影をみることができる。

比較的話者が多く老年層が八丈語を維持している八丈島でも壮年層以下の大半は八丈語を理解できても話すことはできない、あるいは若い世代では理解することも聞き取りも難しい、というのが現状である。十数年もすれば話者は半減し[(4)]、言語継承はより難しくなり、言語を維持することが難しくなる。また、言語を維持するための社会的基盤も弱体化し、消滅してしまう恐れもある。八丈語の記録・保存ができる期間はもはやわずかであり、話者が確保できるうちに早急に調査し、記録・保存することが喫緊の課題である。併せて言語継承活動の必要性が高まっており、また、切迫したものとなっている。

４．保存・継承への取り組み

４.１.自治体による保存・継承に関する取り組み

2009年２月20日付の朝日新聞に「世界2500言語消滅危機、ユネスコ「日本は８言語対象」」とする記事が掲載された。これを受けて、八丈町では早速2009（平成21）年度より、八丈町教育委員会が中心となって八丈語の継承に関する取り組みを始めた[(5)]。学校教育等に方言（八丈語）教育を取り入れようとするもので、その後４年間にわたる取り組みがなされた。この活動については、茂手木清（2015）に詳しい。

４.２.言語の保存に必要なもの

F.Boas（1911）によれば、消滅危機言語をできるだけ偏りなく保存するには辞書・文法書・談話資料の「３点セット」が必要とされる。談話資料は、いわば語学学習でいう教科書にあたるものであり、音声談話資料は教科書と録音教材のセットにあたる。八丈語には優れた文法記述書（金田章宏2001）や地元話者による方言集（浅沼良次1999、山田平右衛門2010など）がある一方、整備された音声資料は少ないことから、現在、筆者は八丈語の記録・保存を目的として、自然談話を音声データベースとして保存し、音声談話資料として整備する活動を行なっている。音声データはそのままでは活用しにくいため、録音した自然談話音声を基に音声の書き起こしを行ない、形態素を切って分かち書きにしたテキストを作成し、逐語訳した共通語訳をつけて談話資料を作成し音声データとリンク付けしている。また、アノテーションを付与することで利用の便を良くし、必要に応じて古型や新型を注として示すなど、研究情報を付しており、将来的にはコーパス化や通言語的な処理に対応できるようグロスづけを進めている。

４.３.収集する八丈語の問題

現在の八丈語の実態は、共通語が混じっているという点で伝統的な八丈語の姿とは異なってきている。共通語が混じらない伝統的な八丈語を話せる話

者は少なく、高年齢層話者同士による自然談話でも八丈語の特徴がよく反映された自然談話を採集するのは非常に難しい。これらを記述する際、第１段階として実態そのままに録音・保存し、自然談話をテキストに起こして記録している。共通語の混じった八丈語は、ある意味不純物が混じった純粋ではないものであるとして保存対象としての妥当性を疑う向きもあるかもしれない。しかし、宮岡伯人（2002）が「上代日本語も、莫大な量の漢語要素をとりいれたが、それによって日本語が中国語の一亜種になったわけではない」と述べているのと同じようなことが現在の八丈語にも当てはまると考えている。つまり、共通語が混じり込んでいるとしてもそれが現在の八丈語の姿であり、実際に行なわれている言語の姿をそのまま第1次資料として記録することが必要であると考えている。

４.４.テキストの修正

しかし、実際の発話と話者の内省とにずれがあることはままあり、内省ではより古い八丈語の体系を持っているが、日頃の習慣で共通語を交えて発話してしまうことはしばしば起こっている。そのため、第２段階として、このテキストを基にして話者に録音を聞いてもらいながら一緒に検討することで、話者の内省に基づいた修正をテキストに加え、自然談話を実態そのままに書き起こししたものとは別に、より伝統的な八丈語の姿を反映した修正テキストを新たに作成している。以下は修正の一例である。

修正例（1） 以下は、八丈語では用言の連体形と終止形との区別が残っているが、現在では混乱が生じている例である。話者の内省では動詞の連体形はオ段になるが、実際の発話では共通語のようにウ段で発音されていることがある。この例では話者の内省に基づき活用形を修正している。

修正前）　とのさまが　ひとやすみ　しやる　ときで

修正後）　とのさまが　ひとやすみ　しやろ　ときで

修正例（2） 以下のように話者によって無助詞になることがあるが、本来、八丈語にはゼロ格はほとんど現れない（金田章宏2001）ため、助詞を補った。話者の内省ではゼロ格となるのは共通語的であり、助詞が入らないのはおかしいということだった。

修正前）べね　おしろい＿　つけて

修正後）べね　おしろいよ　つけて

修正例（3） 共通語の語彙が使われ、八丈語の特徴である助詞の融合がみられないため、伝統的な語彙に修正し、助詞が融合した形に修正した。話者の内省では、八丈語の語彙として「いね」よりも「たぶ」の方が適切であるが、日常生活では「いね」を使うようになってきているという。また、「たぶ」であれば助詞が「を」となるのは共通語的でおかしいので、「たぶーよ」の形にするのが自然であるとの指摘を受け、修正を加えた。

修正前）　この　いねーを　つめで　しごいとってい

修正後）　この　たぶーよ　つめで　しごいとってい

このように日常の会話では、無意識のうちに共通語的要素が混じって発話がなされていることがままあるが、テキスト化し、内省をしてもらうことで、個人の中に潜在している八丈語の文法体系が蘇ってくる。先にも述べたが、修正テキストは自然談話の発話そのままに記録したものとは別のものとして作成している。そのため、自然談話テキストが実際の発話行動を重視しているのに対し、修正テキストでは実際の発話を基にしてはいるが、話者の内省による検討結果を重視している。なお、修正は原則、話者個人の文法体系を記述するという観点から、内省に基づき話者が最も八丈語らしい自然な表現であると納得するまで検討を加えたが、結果として一部に共通語が混じっていてもその方が自然であるとした場合にはその実態を優先し、注記を添えて古型を示した上で新しい表現を優先した。

4.5.「語り」というスタイルを導入した音声再収録

しかし、この方法でははじめに収集した音声とテキストとは異なるものになってしまうため、音声談話資料として整備することはできなくなってしまう。また、修正テキストを元に音声化を行なえば、当然読み上げ音声になってしまい、自然な音声とはいえなくなる。そこで、打開策として、題材を民話に採り「語り」のスタイルを取り入れ、音声が少しでも自然なものに近づくように工夫したものを作成することとした。例えば方言での会話をテキストに基づいて演じてもらうといかにも不自然なものになってしまうが、物語を語るというスタイルを借りれば、不自然さが軽減される。テキストにできるだけ自然な音声をつけるために「語り」のスタイルを取り入れることで、話者の内省に基づく伝統的な八丈語のテキストと、それに基づいた自然な音声とを残すことができると考えたのである。

図2.「なでーし」、八丈町歴史民俗資料館蔵

田中宣廣（2015）は、こうした語りによって「通常の質問回答法調査では得られにくい方言の実態を捉える」ことができることを指摘している。民話には古い表現形式が残されており、既に日常会話ではほとんど話されなくなった単語や古い文法形式が残っていることがある。図２は「なでーし」と呼ばれる稲扱きの道具であるが、それ自体が使われなくなっていたことに伴い、語彙自体も使われなくなっていった。しかし、民話にはこうした語彙が数多く残されている。話者の記憶には確かに存在しているが、普段使用せずまたその必要もないことから調査者も話者もそれに気づかずにいることがあ

るが、民話の収集や昔語りをきっかけに、そうしたことばを話者の記憶から引き出し蘇らせることで記録に残すことができる。

５．紙芝居について

５.１.概要

以上を踏まえ、音声談話資料を基にした八丈語による紙芝居を話者と協働作業で作成している。言語継承活動への応用を目的とし、一般に広く応用できるよう、親しみを持って音声談話資料に触れられるように、使いやすさや取り扱いやすさに配慮した。また、資料の入手のしやすさ、データへのアクセスのしやすさ、わかりやすさといった点も重視した。アクセントについては本来八丈語は無アクセントであるので、共通語の影響でアクセントの型が音声に反映されている場合でも、あるいは本来の無アクセントのままでも特に問題にはしないこととした。

八丈語には、教育委員会による優れた方言かるた（八丈町教育委員会2014）があり、５地域の方言差を考慮に入れた読み札と地域の話者による読み札音声吹込みのCDがあるが、紙芝居もこれに倣って１組の絵に対し、テキストを５地域分のテキストを整備している。

なお、著作権や個人情報の取り扱いに関しては国立国語研究所の規定に準じ、話者の同意を得て規定の手続きを経て作成している。

５.２.紙芝居に収録した民話について

現在、八丈島に伝わる民話を中心に作成している。八丈島に伝わる民話には、「べねじゃらかけじゃら（紅皿欠け皿）」「ももたろう（桃太郎）」[(6)]「ぜんこうじめーり（善光寺参り）」「ひとすてあな（人捨て穴）」「たなばたさま（七夕様）」「やそやえがきひめ（八十八重垣姫）」など、多くがあるが、紙芝居作成には手間と時間がかかるため、最初の段階ではできるだけ作りやすいものを優先することとした。紙芝居にするために適当な長さがあり、物語の展開が比較的理解しやすく、また、絵にしやすいものから作成した。民話のほかにも、話者の提案で宇喜多秀家の伝記や話者個人のいわゆる昔語りを題

材にとって紙芝居を作成し、映像化する試みも行なっている。絵はイラスト製作を趣味とする方に依頼して作成を始めた（図３）が、2017年度からは研究者としても活動しているイラストレーターと連携して作成を進めることで進捗効率をあげている。

図3. 八丈語紙芝居「民話欠け皿」の一場面

５.３.紙芝居作成の方法

紙芝居のテキストの作成方法は、通常の音声談話資料と同様、話者に民話を語ってもらい、音声を採録しテキストに起こした後、そのテキストを話者の協力を得て伝統的な八丈語に修正するというものである。ただし、既に民話をそらんじて語れる話者はほとんどいなくなっており、浅沼良次（2016）など過去の記述や録音を基にして作成しているというのが現状である。

テキスト作成にあたっては話者に協力を仰ぎ、先行研究のテキストを基に修正を加える過程で古い八丈語を思い出してもらったり、より自然な形へと修正してもらい、話者の感覚に沿ったできるだけ自然な八丈語に近づけていき、少しでも自然な音声を収集できるよう注意を払った。話者の内省から、新しい表現の方がより自然であり適切であると判断した場合はそれを採用し、古型を注に入れて示した。作業中、話者が古い世代が話していた表現を思い出すこともしばしばあるため、こうした共働作業は重要である。現在、三根方言と末吉方言とを中心に作業を進めているが、三根方言から作業を開始したのは三根には古いテキストがあり、それを参考としたためである。ま

た、木部暢子編（2013）からは、末吉には古い語形や表現が残っていると考えられることから、他地域に先駆けて作業を進めている。最終的には５地域分を作成する計画である。こうして作成した修正テキストを基に両地域の生え抜きの話者に民話を語っていただいて音声を再収録した。

５.４.紙芝居のフォーマット

紙芝居は一般への応用に資するよう、Web上で広く一般に公開することを前提とし、以下の①～③の形式で作成した。

① 従来の紙芝居と同じもの。絵の裏にテキストが書かれている紙媒体A３判のもの。

② 実際に話者が演じている映像を記録し、字幕を付与したもの。

③ 絵をPPT形式にしたもの。テキストはデータで用意した。

活用する際、①を用いて話者が実際に語るのが最も良いことは言うまでもないが、それだけでは演じられる機会が限られ、また、一般の耳目に触れにくい。②のように、それを映像化したものがあれば、話者がその場にいなくても上映することができる。また、話者を煩わせることなく個人で利用することもでき、容易に気兼ねなくいつでも活用することができる。繰り返し再生することが可能であり学習にも利便性がある。なお、映像の撮影は筆者が一眼レフカメラの動画撮影機能を用いて行なっている。

また、③のように、紙芝居自体をPPTファイルとしてデータ化したものを用意することで、持ち運びや配布が用意にできるようにした。紙媒体のものは少人数に対して用いるには臨場感があって良いが、重さや大きさが持ち運びの障害となる。データ化しておくことで大型スクリーンへの投影なども可能となり、広い会場での使用も可能となる。これを発展させ、興味を持った人がデータを用いて実際に演じてみたり、個人で印刷して紙媒体のものを作成して活用することもできる。

②・③については、現在、公開試行中であるが、音声付き談話資料と同様、国立国語研究所の危機言語プロジェクトのWebサイトに移行しての公開を目指している。

５.５.字幕について

紙芝居の映像化に際しては、語り全文に字幕を付与した。２段組みで八丈語を仮名で書き起こしたテキストを上段に配置し、下段には共通語訳を付与した。八丈語の音韻は琉球諸語などとは異なり基本的に仮名で書き表すことができるため、学習者の理解のしやすさを重視し仮名書きとした。一部で共通語にはない特殊な音が出てくる場合があるが、字幕は仮名で表し映像に付随するテキストに注記を入れた。共通語訳は八丈語と対になるよう、逐語訳を心掛けた。テキストの精錬や共通語訳の作成にあたっては、先に述べた通り、話者との協働作業により行なった。また、八丈語は無アクセントであることに加え、助詞の融合が頻繁に起こるため、形態素の切れ目がわかりにくい。そのため、形態素の切れ目がわかるようにテキストを分かち書きにした。現在の話者の発話では、共通語化の影響で八丈語で話しているときでもアクセントによる句の切れ目を感じることができる場合があるが、それは本来の八丈語が持っていたものではなく二次的なものであるため、特に考慮しなかった。

方言を収録した映像につける字幕に関して櫛引祐希子（2015）には「発話すべてに字幕をつけると画面が煩雑になり、視聴者が画像ではなく字幕の文字ばかり追いかけることになりかねない」との指摘がある。そのため、字幕を選定し、一部に限って付与する方法がとられている。そのメリットについて「字幕が頻繁に出てこないことで登場人物たちの発話に対して耳が敏感になる」という意見が寄せられたことが報告されている。こうした点に関しても検討したが、櫛引（2015）で例示されているのはイベントの一場面であり、紙芝居とは性格が異なるものであった。紙芝居の映像の場合では、あくまで絵は補助的なもので語りやテキストの理解を助けるためのものであり、テキストを親しみやすくするために絵があると考え、紙芝居には全文に八丈語のテキストと共通語による対訳とを付けた。なお、これらはWeb上での公開を前提としていることから、国際的な公開に耐えるよう、英訳とグロス付けをしたバージョンの作成を進めている。このほか、字幕のないもの、テキス

トファイル、音声ファイルなども別々に用意し、ダウンロードできるように整備を進めている。

5.6.危機言語継承への貢献の可能性

八丈語を学習する際、語彙の習得はできても、それをつないで文にすることは難しく、また、さらにそれを発話するのは困難である。前述の方言かるたは語彙の習得に有益であり、5集落の方言差も反映されており八丈語を学ぶ導入口として優れているが、かるたという性格上テキストが短く、読み上げ音声である点では限界がある。もっともテキストが短いことには八丈語を文ごと暗記できるといったメリットもある。一方、紙芝居の語りは、より長い単位の八丈語音声を聞き、学習することができる点で方言かるたでの学習の発展に適したものといえる。方言かるたと紙芝居とを連続的な学習教材として捉え、かるたで方言に親しんだ人が、その延長線上で学習を発展させるために紙芝居を活用することを想定している。

さらにこの紙芝居の特徴は、映像を見て学習するだけではなく、PPTファイルをダウンロードすることで、学習者自身が紙芝居を演じることができるという点にある。あたかも八丈語を操り、話しているかのような体験ができるが、こうした親しみやすさや臨場感こそ、言語継承活動の裾野を広げていくために重要である。また、実際、紙芝居のテキストは質的に担保されたものであり、映像を見て学習し、PPTファイルを使って練習を積むことで学習者自身が八丈語紙芝居の語り手となることができる。いったん途絶えかけた民話語りも紙芝居を媒介にして復活し、また語り継いでいくことで民話の語りという言語の限られた一面だけではあるが、質的に担保された八丈語を残すことができるのである。また、紙芝居を通して新しい語り手が生まれるという点でも生産性・創造性がある。

このほか、現実問題として、紙芝居は投資費用が比較的少額で済むという点も長所といえる。イラストレーターへの謝礼、紙媒体のものを作成する際の印刷費程度で作成が可能である。これをPPTファイルの形で保存し、Web上で配布すれば、半恒久的に使い続けることができる。

こうした試みは2016年度に始まったばかりであり、紙芝居自体まだ十分に普及しているとはいえず、一部の話者や協力者の手で広められているに過ぎない。その一方で、こうした活動を通じて、より多くの作品を用意してほしいという要請や反響があり、滑り出しとしては順調であると考えている。現在は、教育の場でこうした資料を使うことができないか、検討を重ねている。

５.７.消滅危機言語保存への貢献の可能性

紙芝居を音声談話資料としてみた場合、長い話でも７分程度であり、テキスト量は決して多くはなく、音声資料としてはいささか情報量に乏しい。その一方で、資料性という面からは、個人差や表現方法の差などが見えてくる点で興味深い資料となり、また、民俗資料としても価値がある。

現在、同じ絵に対し、複数地点で複数の話者のテキスト作成を進め、地域や話者ごとの表現の違いを反映させたテキストを複数作成している。金田章宏（2001）では地域による文法や語彙は同じものとみてよいと述べられている。しかし、実際に作成してみると、待遇表現の程度差など、表現形式には個人差が現れる場合がある。構造は同じでも、地域や話者によって、その発露の仕方に違いがみられる。記述・保存の観点からは、八丈語内の多様性の保存に貢献できる可能性がある。消滅危機言語の記述、再活性化の際にはどうしても、個人差や、あるいは小さな地域差といったものは取り除かれてしまう。言語復興が行なわれる際、新たな話者の中では標準化が行なわれる。その結果、本来の八丈語が持っていた地域的多様性が失われてしまう（実際に、大賀郷内で中心部と、大里の辺りとでは地域差があるように、同一地域内でも地域差はみられる）。紙芝居はこうした多様性を残した資料として貢献できる可能性を持っている。また、同じ内容で複数の地域や複数の話者のテキストと音声を揃え、単純比較することができるという点で、地区の違いや個人差、表現の範疇や待遇表現の許容範囲などを把握する方言資料、言語継承用教材としても意味のあるものである。

自然談話を採録する際に、場面設定や話題の設定の難しさがあるが、あらかじめ場面や会話の内容を設定しておくことで、話の内容はある程度はコン

トロールできる。例えば、大野眞男・小林隆（2015）では、方言が用いられる場面を言語行動の目的別に細かく設定し、調査を体系的にデザインする取り組みが紹介されており、通常の自然談話収録の際はこうした先行研究を参考に調査設計をしている。ただ、複数の地域でそれを行ない、音声をテキストにしたとき、場面ごとの比較はできるが、テキストとしてそれらを単純比較することは難しい。おそらく多くの研究者にとってこのことはあまり重要な問題ではなく、むしろいかに様々な場面の自然な音声を採録できるかが重要である。しかし、学習者にとっては、同じテキストを基に方言差が現れるように作成すれば単純比較が可能となり、それを利用して方言差や個人差、許容範囲などを把握できる点にメリットがある。また、各地域で複数の話者のテキストを作成しておくことで、表現の違いがどこまで許容されてるのかを把握することもできる。

６．まとめ

テキストには語り手の特性が反映され、同じ集落内でも個人差が現れ、敬意の程度差なども現れやすい。一方で、５地域の特徴の対立が曖昧になってきている部分もあり、今後、こうしたことを踏まえて、テキストを精選していく必要がある。現在は地区ごとに話者を決め、その話者の体系そのままに記録しているが、複数の話者のテキストをデータベースとして並行して整備することも進めている。題材に関しても民話だけではなく、いわゆる昔語りにも絵や映像をつけることで映像資料化することも視野に入れて進めている。

近年、こうしたドキュメンテーションについて、話すときの身振り手振りや、伝統的な唄や踊りといったものも含めて記録し、映像資料を作成することの重要性が論じられている。田窪行則（2013）は「言語を真に記録するためには単に保存するだけでは十分でなく、メタデータを充実させて、書き起こしを行い、単語の訳、文の訳をつけなければならない。また内容の真の理解には、社会学や文化人類学的な解説も必要となるであろう」と述べており、また、Himmelmann（1998）は言語に関連した社会的行動やジェスチャーなども含めて記録に残しておくことの重要性を主張している。今後はこうした

点にも重点を置き、音声・映像資料の拡充を図るべく検討を重ねていく。

音声・映像資料は八丈語の保存という目的だけではなく、教材や研究資料など様々な分野に応用でき、学術研究や言語継承活動に大きく貢献できる。音声談話資料があれば、これを媒介として新たな研究者や協力者が参集しやすくなり、そうした研究者や協力者と連携しての伝承・保存活動がしやすくなる。また、現地のコミュニティの要請に応え、研究成果を地元に還元することで方言継承活動の一助となることができ、子供たちや、それまで八丈語にあまり馴染みや関心のなかった人たちと、高年齢層の話者とをつなぐ役割を担うことで、八丈語を保存するだけでなく、地域コミュニティの活性化にも貢献できる。結果として、言語の消滅を遅らせることにも寄与できる。

今後は普及に努めるとともに、こうした資料を学校教育や、イベント、観光の場などでの活用を目指し、既に八丈語が話せなくなっている世代や、島外からの移住者にも八丈語に馴染みや親しみを持ってもらうことに役立てたいと考えている。大野眞男・小林隆（2015）では、方言による語りの学習教材の開発・作成の必要性について述べられているが、さらにそれを活用する、語りを伝えるための場を設定することの必要性や、その場を地域住民や子供たちに伝える必要性についても触れられている。活動は始まったばかりではあるが、資料の拡充と併せてできるだけ早期にこうした活動を進めていくのが今後の課題となろう。八丈語の保存は、グローバル化の中で失われつつある地域の多様性をとどめ、多様な文化を維持することに社会的貢献を果たすに資するものであると位置付けることができるものと考えている。

注

(1) 八丈語は従来八丈方言、あるいは八丈島方言と呼ばれてきたが、ユネスコによって「消滅の危機に瀕する言語」のリストに登録された際、八丈語という名称が用いられたことに準じ、本稿では八丈語の名称を用いる。

(2) ユネスコの消滅の危機に瀕した言語についてはhttp://www.unesco.org/languages-atlas/を参照のこと。判断尺度については木部暢子・山田真寛（2011）に詳しいが、「危険」は、６段階の評価のうち「消滅」「極めて深刻」「重大な危険」に次ぐものである。

(3)　2017年7月1日現在7588人、4386世帯（八丈町HPより）。http://www.town.hachijo.tokyo.jp/

(4)　木部暢子・盛思超（2011）では、国立社会保障・人口問題研究所のデータを基に、2035年までの人口推移のグラフを作成し、日本の消滅危機言語を要する自治体の中でも、八丈町の人口減少が著しく、今後30年間で４割が減少するとしている。

(5)　青ヶ島村ではこうした取り組みは特に行われていない。しかし、取り組みの必要性を感じている話者もおり、そうした方々と研究者が協力して記録・保存を進めていく必要がある。

(6)　通常知られている「桃太郎」とは物語の運びが異なる。八丈島バージョン。

参考文献

浅沼良次（1999）『八丈島の方言辞典』朝日新聞出版サービス.

浅沼良次（編）（2016）『日本の民話40八丈島の民話』未来社.

大島一郎（1980）『八丈方言の研究』東京都立大学国語学研究室.

大島一郎（編）（1986）『南部伊豆諸島方言の記述的・社会言語学的研究』科学研究費成果報告書.

大島一郎（編）（1987）『八丈島における言語変化―共通語化の側面を中心として』東京都立大学国語学研究室.

大野眞男・小林隆（編）（2015）『方言を伝える　3・11東日本大震災被災地における取り組み』ひつじ書房.

金田章宏（2001)『八丈方言動詞の基礎研究』　笠間書院.

金田章宏（2011）「八丈方言―古代東国方言のなごり」『日本の危機言語―言語・方言の多様性と独自性』、北海道大学出版会、153-169.

金田章宏（2014）「東京都伊豆諸島八丈方言」『文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究」報告書』、国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所、3-10.

木部暢子（編）（2013）『国立国語研究所共同研究　消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究　八丈方言調査報告書』、国立国語研究所.

木部暢子・盛思超（2011）「人口統計から見る危機的な言語・方言」『文化庁委託事業　危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、37-41.

木部暢子・山田真寛（2011）「消滅の危機の程度に係る判断基準・根拠について」『文化庁委託事業　危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』、東京：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、9-16.

櫛引祐希子（2015）「方言を撮る―方言と映像の出会い―」『方言の研究』1、ひつじ書房、229-249.

田窪行則（2013）「危機言語ドキュメンテーションの方法としての電子博物館作成の試み　宮古島西原地区を中心として」『琉球列島の言語と文化　その記録と継承』、くろしお出版、1-19.
田中宣廣（2015）「昔語り資料にみる方言自然談話の生成―方法と実践例―」『日本方言研究会第101回研究発表会発表原稿集』、日本方言研究会、1-8.
内藤茂（2002）『八丈島の方言』私家版.
八丈町教育委員会（2014）『改訂・五地域版　八丈・島ことばかるた』.
八丈町立三原中学校（2013）『実践報告集』.
平山輝男（1965）『伊豆諸島方言の研究』明治書院.
平山輝男（1968）『日本の方言』講談社.
北条忠雄（1966）『上代東国方言の研究』日本学術振興会、東京：丸善.
宮岡伯人他（編）（2002）『消滅の危機に瀕した世界の言語―ことばの多様性を守るために―』、東京：明石書店.
茂手木清（2015）「八丈町の「八丈方言」継承の取り組み」『文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」報告書』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、1-10.
山田平右エ門（2010）『消えていく島言葉 ～八丈語の継承と存続を願って～』、郁朋社.
Boas,Frans（1911）Introduction.Handbook of American Indian Languages.Part1. Washington Smithsonian Institution,Bureau of American Ethnology,Bulletin 40.
Himmelmann,Nikolaus（1998）”Documentary and Descriptive Linguistics”.Linguistics 36,161-195.Berlin:de Gruyter.

謝辞：八丈島の話者の方々、教育委員会の方々には多くの貴重なお時間を割いていただき、ご教示ご協力くださったことに感謝する。また、研究データの使用を許可してくださった千葉大学の金田章宏教授に感謝申しあげる。

本稿は日本方言研究会第103回研究発表会（2016年10月28日、東北文教大学）において行なった口頭発表を基に加筆・修正したものである。多くの参加者の方々から貴重なご意見を賜ったことに感謝する。

本研究は、以下の研究費助成を受けて行なった成果の一部である。

(1) 科学研究費補助金「消滅の危機に瀕する八丈語の調査・記録と談話資料の作成・公開」（特別研究員奨励費、15J11988、研究代表者：三樹陽介、平成27～29年度）

(2) 科学研究費補助金「消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料とその分析に関する研究」（若手研究（B）、15K16766、研究代表者：三樹陽介、平成27～29年度）